



と www.tenpla.net

プラネタリウム

☆ 高梨直紘 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台)

今月のお題

測れるものはすべて測るべし

天文学と社会のつながりを示すデータを、みんなで知恵を絞つて集めましょ、という話です。

像についてはさっぱり分かっていなかった、と言っても良いでしょう。なんてもったいない!

そうなればやることはただひとつ。データを作るまでです。理想を言えば全数調査でしょうが、それには莫大なコストがかかるので、私たちの手には負えません。そこで、まずは天プラでもできる調査として、一般市民を対象としたサンプル調査を行うことにしました。学術調査に強い調査会社を使って、1000人規模のアンケート調査を3年にわたって3回行うことを計画しています。天文学的に言えば、これはサーベイ観測のようなもの。なにか面白いものが出来たら、そこからさらに深掘りする調査を行うものもありでしょう。取得したデータは、天文学のサーベイ観測と同様、一定期間後には公開する予定で準備を進めています。

そもそも、このようなデータを生み出す仕組みを設計することは、実は天文台を設計することと一緒に感じます。違いは、相手が天体であるのか人間であるのかだけ。人間の集まるところは、良い観測所、すなわち人文台を作る適地ということになります。そう考えると、全国各地にあるプラネタリウムや公開天文台などは、宇宙に関心のある市民を観測するための絶好の場所だと言えましょう。さまざまな種類の人文台が作られ、そこで天文学と社会のつながりを示す多様なデータが生み出されていくようになれば、その分析に基づいて私たちがとるべき戦略も見えてくることでしょう。興味がある人は、ぜひ一緒に考えましょう!

私が中高生だった頃、学校の近くに「東京で2番目においしいラーメン」を売りにした店がありました。1番を名乗らないあたりに、妙な説得力と人間くさを感じて、味はさっぱり覚えていませんが記憶に残る店でした。インターネットもなく、誰もその根拠を調べようがない名乗ったものの勝ちの時代だからこそ成立した、味わい深い売り文句だったと思います。ちなみに、近くには「東京でいちばんまずいラーメン」を売りにした店もありました…下町、アーメージング。

根拠を明らかにせず、仲間内で通じる空気感でなんとなく押し通す…というのは、別に悪いことではありません。そっちの方が話が早いでしょうし、経済的なコミュニケーションだと言えます。その一方で、違う考え方の人や空気を読めない人を排除することにもつながり、仲間内だけで小さくまとまってしまう危険性もあるでしょう。手間はかかりますが、誰もが認めることができる客観的な根拠を示すことで、仲間の輪の中にはいない人とも意見を交わせるようになります。そのような他者との対話を通じて、自らの考え方もまた成長させることができるでしょう。

「日本の天文教育普及は進んでいる」「天文学は科学コミュニケーションの先進分野だ」「天文学は社会を豊かにする」「日本では天文学が人気だ」などといったことは、私もよく言います。天文教育普及の業界内でもよく聞く言い方もあります。これまで培ってきた私の感覚において、これはいずれも正しいと信じられます。ですので、自分の責任の下でこれを主張すること自体にはなんのためらいもないのですが、これを裏付ける客観的なデータがあれば、もっと説得力を持って議論することができるのに…。そんなデータはどこかにないものでしょうか。

結論から先取りすれば、そのようなデータは日本にはほとんどないようです。日本公開天文台協会のまとめている『公開天文台白書』や、日本プラネタリウム協議会のまとめている『プラネタリウムデータブック』のように優れた取り組みもあるのですが、一般市民の天文学への関心や理解度を広範に測る取り組みはほとんど行われてこなかったのです。足下にはすごい鉱脈が眠っているらしいことは知っていても、その全体



3年ぶりに対面でも開催された日本天文教育普及研究会の年会に参加してきました。発表もしましたよ!